

山形 昭の体育科（第6学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

体育科学習指導要領の目標には、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」と明記され、生涯体育の重要性が述べられている。運動に親しむ資質や能力とは、運動への関心・意欲、仲間とのかかわりなど様々である。中でも私は、運動課題を解決する学習を通して、運動の仕方を自ら考えたり工夫したりしながら動きや技能を身に付ける力こそが、体育科で求める最も大切な資質や能力であると考え。なぜなら、その力を備えた子どもは、他の運動領域でも、その経験を活用し、新たな運動課題を解決していき、動きや技能を身に付けることができるからである。

その資質や能力を育てるときに問題となるのが、動きや技能を身に付ける際の動き方の修正にある。動きや技のポイントを教師が子どもに示したり、修正箇所をアドバイスしたりしても、うまく修正できない子どももいる。そのような子どもは、教師から与えられた体の動かし方を自分の体の動かし方に活かさないのである。

その問題を解決しようと考え、昨年度は中学年の体づくり運動「多様な動きをつくる運動(遊び)」の領域において、部位に着目させて体の動かし方をとらえられるように指導を工夫してきた。何人かの子どものは、部位に着目して体の動かし方を考えたり工夫したりして自分の動きを修正し、動きを身に付けることができた。しかし、中には動きを身に付けられなかった子どももいる。それは、部位に着目して動きを修正できなかったためである。

その原因は、2点考えられる。昨年度は、動きを身に付けるにはどうすればよいかという問いをもった子どもに、部位に着目させる学習カードを提示し、自分の体の動かし方を観察させて、その後手本の映像を見せて体の動かし方を修正させてきた。簡単に言うと「問い→部位に着目→自分の映像→手本の映像」の順番である。しかし、この授業の組み方だと、子どもは自分の目指すゴールイメージをもたないまま、部位という視点を与えられるため、自分の体の動かし方を観察しても、部位に着目した修正点を見いだせなかったのである。もう一つは、できない原因を追究させるために自分の映像と手本の映像とを比較させようとタブレット端末を使わせたのだが、タブレット端末を1台だけ与えたために、自分の映像と手本の映像を順番に見るしかなかった。そのため、比較が難しかったのである。

そこで、今年度は、問いをもった子どもに手本の映像を提示し、ゴールイメージをもたせた後に部位に着目させて自分の体の動かし方を観察させる。こうすることで、部位に着目した修正点を見いだしやすくする。さらに、手本の映像と自分の映像を同時に見ることができるようにして、比較しやすくさせる。こうして、高学年の器械運動において、「**運動のこつ**」と**そのこつの見だし方が分かり、技能が上達する子ども**を目指す。「こつ」とは、課題解決に必要な部位に着目した体の動かし方のことである。

2 主張する働き掛け

(1) 「中核的な学習内容」

部位に着目した体の動かし方という考え方を習得し、技能が上達すること

(2) 「学びをつなぐ力」

- ① 比較するすべを用いて、自分と手本の体の動かし方の相違点から、できない技ができるようになるための体の動かし方を収集する力
- ② 関係付けるすべを用いて、収集した体の動かし方を実際に試してみることで、技を身に付けるための「運動のこつ」を見いだす力

(3) 働き掛け

まずは、基礎となる運動感覚を養うために、学習カードを配布し、易しい運動に取り組みさせる。子どもは、学習カードにかかれた技を、自分ができそうな技から取り組む。ここでの子どもは、「勢いを付ければできる」などと考え、部位に着目して「運動のこつ」を見いだして練習すればできるようになるとは考えていない(C0)。

働き掛け1

「手本の映像」を提示し、体のどこに問題があるのかと問う。

問いをもたせるための働き掛けである。技の運動局面ごとの絵を提示し、それぞれの技の中から自己の能力に適した技を一つずつ選択させる。選択した技を実際に試す中で、できるようになった技はそこまでにさせて、新たな技に取り組みさせる。難易度を高めて新たな技を設定させるために、やがてできない技が出る。自分ができない技が出た子どもにめあてを問う。子どもは、できない技ができるようになりたいというめあてを立てる。

めあてを立てた子どもに「**手本の映像(『対象』①)**」を提示し、「どうしてその技ができないのか。その技ができないのは、体のどこに問題があるのか」と問う。自分の体の動かし方を意識している子どもは、「ここがよくないのかな」と予想したり、意識していない子どもは「自分とどこが違うのか、よく分からない」と考えたりする。予想した子どもには、本当にできるようになるか試させる。しかし、まだ明確な見通しをもってはいないために、達成できない。このように、できない技ができるようになりたいというめあてをもちながらも、できるようになるための明確な見通しをもてていない姿を問いをもった姿とする。

また、この時点で技ができた子どもに、「なぜ、その技ができるのか。気を付けていることはあるか」と問い、技ができるようになるための「運動のこつ」を付箋に記入させておく（達成の秘伝書）。さらに、同じめあてをもった子ども同士でペアやグループを組んでおく。

働き掛け2

できない技ができるようになりそうな体の動かし方を問い、できない自分の運動の様子を動画撮影させる。

自分の体の動かし方と手本の体の動かし方との比較により、課題解決に必要な体の動かし方を収集させ、できるようになるための見通しをもたせる働き掛けである。問いをもった子どもに、「できない技ができるようになるには、体のどこをどう動かしたらよいか」と問い、学習問題を提示する。その後、もう一度「手本の映像（『対象』①）」を提示したり、できない自分の運動の様子を動画撮影させたりする。撮影後、手本や自分の体の動かし方をワークシートに記述させる。子どもは、比較するすべを用いて、「自分の映像」と「手本の映像」とを比べる。このとき、自分の映像と手本の映像とを比較しやすくするために、2台のタブレット端末や拡大モニターを使わせたり、映像を重ねて提示できるアプリを使わせたりする。

ここで、部位に着目して違いに気付いた子どもの考えを発表させて、部位に着目するという視点を共有する。子どもは、その視点を基にして、自分と手本の体の動かし方の共通点や相違点を考える。そして、できない原因に気づき、手本の体の動かし方をまねしてみるとできるようになるのではないかと見通しをもつ。ただ、ここでは仮説をもった状態なので、次の働き掛けで実際に運動させて、仮説を検証させる。

働き掛け3

個々の能力に適した練習の場を設定し、試した「運動のこつ」を評価させる。

「運動のこつ」を見いだし、できない技ができるようになるための働き掛けである。「手本の体の動かし方をまねしてみよう」と考えた子どもに、様々な練習の場を提示し、自分に合った練習の場を選択させ、試しの運動を行わせる。試しながら、自分が選んだ体の動かし方が自分の課題を解決するのに適しているかどうかを◎○×の3段階で評価させる。その際、自分の運動の様子を動画撮影させる。このときの子どもは、できない原因と手本の体の動かし方を試した結果とを関係付けるすべを用いて判断する。

試した体の動かし方で、自分の課題を解決する子どももいれば、そうでない子どももいる。解決できない子どもがいた場合には、できた友達の運動のこつが書かれた「達成の秘伝書（『対象』②）」を提示する。できない子どもは、「対象」①や「対象」②を見たり、練習の場を変えたりする。子どもは、「『対象』から新たな情報を得る→練習の場を選択する→試す」という一連の流れを繰り返す（本時1時間目。2時間行う）。そして、「運動のこつ」を見いだし、できなかった技ができるようになったり、上達した（練習の場のレベルが上がった）りする。

学びをつなぐ力を自覚させる働き掛け

「見付けたこつ」と「こつの見付け方」を問い、「上達への道」を振り返らせる。

学びをつなぐ力を自覚させるための働き掛けである。できなかった技ができるようになった、もしくは、上達した（練習の場のレベルが上がった）子どもに、「見付けたこつ」と「こつの見付け方」を問い、「上達への道」を振り返らせる。そして、「運動のこつ」とそのこつの見だし方が分かり、技能が上達する子どもになる。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な学習内容」を創り出すことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3を受けて、部位に着目した体の動かし方という考え方を習得し、技が上達することができたかどうかを、ワークシートの記述や実際の様子から検証する。
- ② 働き掛け2および3を受けて、比較するすべや関係付けるすべを用いて、自分の挑戦する技ができるようになるためのこつを収集・判断することができたかを、ワークシートおよび実際の様子から検証する。
- ③ 働き掛け4を受けて、想定した「学びをつなぐ力」①②を自覚しているかどうかを、体育ノートの記述から検証する。

4 年間の授業計画

- | | | | |
|-------------|------|--------------------|-------|
| (1) 指定研究授業 | (6月) | 「夏季フゾリンピック～鉄棒運動～」 | (6時間) |
| (2) 中間検討会 | (9月) | 「秋季フゾリンピック～マット運動～」 | (6時間) |
| (3) 初等教育研究会 | (2月) | 「冬季フゾリンピック～跳び箱運動～」 | (6時間) |